

キジハタの種苗生産技術開発に関する研究

富山県農林水産総合技術センター 水産研究所

1. 背景・ねらい

キジハタは秋期に多獲される沿岸性の高級魚で、放流事業による資源増大の要望が大きい魚種である。富山県では漁業関係者の要望を受け、平成6～13年度に種苗生産技術の開発を目指したが、当時は種苗の大量生産までは至らなかった。

そこで、平成23年度からキジハタの大量生産技術の開発を再開し、生産種苗を用いて放流効果の検証を行うことを目的に調査を実施した。

2. 成果の概要

(1) 種苗の大量生産技術の開発

飼育初期のキジハタ仔魚は2日齢以降の夜間に沈降死することが知られており、水槽内の水流調節により仔魚を沈ませない方式が有効と考えられることから、飼育初期の水流調節方法を中心に飼育方法を再検討した。しかし、平成23年度は底注水により横方向に水流調節を施したが7日齢以内に全数へい死、平成24年度はエアーによる水流調節を試みたが、わずか59尾の生産のみであった。そこで、平成25年度からはクロマグロやスジアラ等で効果が確認されている底注水による上方向と横方向への水流調節方法を応用したところ、飼育初期の生残率が大幅に向上し、平成25～28年度は43～83千尾の大量生産が可能となった。

(2) 種苗の放流効果の検証

平成25年度から種苗の大量生産が可能になったことで、富山県では初めて約35千尾の大量の標識放流が実現した。本標識放流は、平成28年度まで安定して実施できていることから、富山県における安定的な種苗の大量生産及び放流が可能になったと考えられる。

現在、標識放流された種苗が県内市場にどれくらい水揚げされているかの調査を継続的に実施しており、平成28年度には標識魚と思われる個体が若干数だが確認されている。来年度以降には、標識魚が再捕されると考えられることから、今後も市場での再捕魚確認調査を継続して実施することにより、放流効果の検証に繋げていく予定である。



写真 キジハタ種苗の標識放流の様子

3. 成果の活用面・留意点

本研究により、初めて富山県におけるキジハタ種苗の大量生産及び放流が可能となり、これにより放流効果調査ができるようになった。今後はより健全な種苗を効率的に生産する技術の開発や放流効果の検証を進め、キジハタの栽培漁業の事業化に必要な知見を集積していく。

4. 問い合わせ先

農林水産総合技術センター 水産研究所 栽培・深層水課
担当：町 敬介 TEL：076-475-0036